



## 年頭のごあいさつ

医学研究科長・医学部長 本間研一



明けましておめでとうございます。医学研究科・医学部教職員の皆様におかれましては、新しい年への期待感に溢れていることと存じます。

さて振り返りますと、昨年は国立大学法人化の実体化が急速に進んだ年で、我が北大医学研究科・医学部もその影響をま

ともに被った年がありました。まず、教育研究に必要な運営費交付金は10%弱（平成15年度比では17%弱）削減され、予想をはるかに上回る緊縮財政となりました。その結果、分野に配分する運営費交付金も、従来の教員の職種や数を基本にした配分法から、分野が担当する授業科目単位数をも考慮に入れた新しい配分法に変更しました。平成19年度からは非常勤講師の経費がまったく交付されないので、この傾向はさらに強まると思われます。つまり、教育経費の確保のために、研究費はほとんどすべて外部資金でまかなわざるを得なくなります。また、現在研究科で一括して負担している光熱費等も、今後は分野で管理することにしたいと思っています。節約のインセンティブを上げるためです。ちなみに、平成18年度は3～5%の経費削減が予想されています。

より衝撃的だったのが、人件費の削減です。北大では、戦略的な人事を行うために、全教員の約5%に相当する全学運用定員分の人件費の負担を各部局に求め、医学研究科・医学部は、平成21年度までに教授6名、助教授5名、助手5名に相当する人件費を拠出することになりました。その結果、教授人事をしばらく中止せざるを得なくなり、分野等の再編も視野に入れた改革が迫られています。なお、前述の非常勤講師人件費を現在の水準（数）で部局負担すると、助手1.5名分に相当する人件費を削減しなければなりません。また、事務職員数も1割強削減されることが決まっています。事務業務のさらなる合理化や教室事務との連携強化が今後の課題です。さらに、現在政府が検討している国家公務員数の削減が大学に波及することは避けられないと考えられています。

人件費に関しては、明るい話題はありません。

北大病院の独自性の強化も医学研究科・医学部に大きな影響を及ぼしています。病院は現業部門ですので、経営が不安定になるとその影響は大学全体の運営に関係してきます。臨床系教員は否応なく診療に時間を割かざるを得なくなりました。これに拍車をかけたのが平成16年度から導入された新臨床研修制度で、医学部卒業生の大学離れが加速しています。従来、大学病院の診療の一端を担っていた研修生が減少し、教員の診療負担が増加しています。この傾向は大学にとっては大変危険で、臨床系教員が大学本来の目的である教育研究に費やす時間が減少し、高等教育が空洞化する恐れがあります。医系教員の大幅な増員が必要不可欠ですが、実状はすでに述べた通りです。当面の対策としては、特に臨床系の分野で、従来分け隔てなくおこなってきた職務を、研究科（学部）教員は教育と研究に、病院教員は診療と教育に軸足を置き、役割をある程度分担することが必要となってきます。リハビリテーション科の新設や循環器外科の強化はこの方針に基づいたものです。なお、平成19年度からは教員の呼称と業務内容が変更され、従来の助教授は准教授となり、職務内容は教授と同じになります。また、助手は助教と研究支援職員に分けられ、いずれも5年の任期付きです。

法人化の極め付きは、文部科学省の文教施設費の大幅な削減です。その結果、医学研究科・医学部の研究棟改修工事が2年間ストップしたままで、放置されています。医学研究科改修工事は、北大から概算要求の第1位で文部科学省にあがりましたが、財務省には予算申請されませんでした。改修が認められたのは、国策としてプロジェクト研究費が措置されていた人獣共通感染症センターの動物舎と、国が民間から借金するPFI（Personal Financial Initiative）でおこなう農学研究科研究棟の改修工事だけでした。現在、中断している改修計画を如何に進めるかをテーマに、北棟と中研究棟に研究施設をもつ医学研究科と遺伝子病制御研究所との間で、検討が進められています。ただし、老朽化したという理由だけでは概算要求のプライオリティーは上がりず、改修経費

の半分を大学（部局）が負担するとか、同時に機構改革をおこなうなどの工夫が必要と思われます。施設関係で明るい話といえば、教職員同窓生や父兄、同窓会の寄付と総長裁量経費による学生サークル室（旧RI棟）と学生食堂（旧MRI棟）の整備で、学生サークル室は約2倍に、学生食堂は約3倍に拡張されることになり、4月から利用可能となります。

法人化後の厳しい話が続きましたが、この逆境の時代を乗り切るべく、医学研究科・医学部は3つの改革に向かって現在、着々と準備を進めています。その第1は、大学院の改組です。従来、大学院生は進行中の研究に従事する、論文生産のための安価な労働力とみなされる傾向があり、学位を取得しても必ずしも研究者として自立するレベルに達していない場合がありました。新しい大学院では、研究の背景、仮説の設定と実験計画、実験結果の解析法から解釈にいたるまで、研究者として必要な素養を習得することに重点をおきます。また、何を目標として大学院で学ぶかを明確にします。この様な改革により、新卒医師の大学離れと、それと連動すると予想される臨床系大学院生の減少に対応したいと考えています。内容の詳細については、近々発表予定の大学院再編計画（平成19年度概算要求事項）に書かれていますが、その骨子は、博士課程では融合的教育を促進するために6専攻を1専攻にまとめ、医学医療分野の研究者や教育者を育成する「基盤医学コース」、医療行政や社会医学の専門家を育成する「社会医学コース」、臨床研究が遂行できる高度な臨床医を育成する「臨床医学コース」の3つの教育課程コースを設置します。臨床医学コースでは、最大2年間、道内の特色ある医療機関に設置する連携大学院で臨床研究を展開します。修士課程にも課程教育コース制を導入し、広い学問背景をもつ医学研究者を養成する「医学専門コース」、医学領域の高度専門職業人を育成する「医科学コース」、公衆衛生分野等における高度専門職業人を養成する「社会医学コース」を設置します。「医学専門コース」では、学部教育と同等レベル以上の基礎医学（生理系・病理系）教育をおこないます。国際性の涵養を重視したカリキュラムや学位審査制度の改正も計画しています。また、大学院改組や教員職務内容の変更にともない、教授会構成や審議事項の重点化、教員人事の弾力化などを図りたいと考えています。

第2の改革は、北大全学で行われている大型プロジェクト研究の医学・医療への出口を担当する研究センターの設置です。法人化後の大型研究費（教育研究特別経費等）は、従来の部局単位の概算要求ではほとんど採択されなくなっています。全学的な視点からの北大プロジェクトとして概算要求が求められています。その受け皿を医学研究科に作る計画です。5年間の期限付きで、医学研究科から基幹分野（基幹教員）、全学から連携分野（全

学運用定員などを利用した任期付き連携教員）を募り共同研究を展開します。そのためのプラットフォームを東北研究棟や附属動物実験施設に構築します。このプラットフォームに北大の英知と外部資金が結集し、医学研究が活発に展開されることが期待されます。候補に挙がっている研究プロジェクトは、発達脳科学、再生医療、分子イメージング、人獣共通感染症などです。問題は初期投資ですが、現在北大事務局と相談し、銀行からの借入金も視野に入れた方策を検討中です。

第3の改革は医学部教育です。急速に発展する医学医療に対応するため、知識集積型の教育から課題解決型の教育への転換が求められて久しく、様々な教育法が考案され実施されていますが、必ずしも成功しているとは言えません。医学研究者や医師、医療担当者は生涯学習が運命づけられているので、医師養成にあたっては、学部4年間の限られた期間内だけを考えるのではなく、少なくとも卒業後6—8年をも視野に入れた教育プログラムを設定すべきであると思います。まず、一貫したカリキュラム編成の阻害要因となっていた学士編入を4月から10月に移し、医学専門教育を始める時期を一般入学者と一致させます。また、入学時から学生を各分野に配属し、医学研究者や医師と身近に接する機会を作り、基礎的な医学研究に触れさせて医学・医療に対する認識を深めさせるとともに、英文論文の作成や国際学会での発表などを通し、国際性を涵養します。さらに、親身な進路相談や厳格な成績人物評価で、医師、医学者には不向きな学生を早期に方向転換させる制度を考えています。

最後に、医学部創立90周年の事業に触れたいと思います。医学部が設置されたのは大正8年（1919年）で、平成21年（2009年）に90周年を迎えます。医学研究科・医学部では創立90周年を祝うべく記念行事実行委員会を設置しました。記念行事の目玉は、医学部会館（仮称フラテ館）の建築で、10億円を目標に募金を行うべく期成会の設立を計画しています。医学研究棟の改修計画と連動させ、事務機能、集会開催機能、展示機能なども備えた総合的な建物を目指しています。北大医学部同窓会にも協力して頂けることが決まりました。旧7帝大の医学部では唯一北大のみが医学部会館を保有しておらず、なんとかこの機会に建築したいと考えております。

今年は、法人化後の北大医学研究科・医学部が格段に発展する、その基礎をつくる重要な年と位置づけています。皆様のご協力をお願いします。そこで、教職員のインセンティブを少しでもあげるべく、本年度から医学研究科に優秀研究賞、優秀教育賞、優秀論文賞、特別賞を制定し、毎年優れた教職員を顕彰することにしました。1月31日が締め切りです。奮ってご応募下さい。

本年が、皆様にとりまして最良の年となることを祈念して、年頭の挨拶と致します。

## 年頭にあたって

医学部保健学科長 松野一彦



平成18年（2006年）を迎えるにあたり、一言ご挨拶を申し上げます。まずは、日頃、保健学科ならびに医療技術短期大学部の学生の教育にご協力をいただいておりますことに、心から御礼申し上げます。おかげさまで、医療技術短期大学部の方は、本年3月で最終期が卒業することになり、専攻科助産学特別専攻の1年間の教育を残すばかりとなりました。平成19年3月には、20数年間の教育にピリオドをうち、閉校式を迎えることになります。

さて、平成15年10月に設置されました医学部保健学科は3年目を迎ることになります。平成16年に入学した第1期生は、看護学専攻60名、放射線技術科学専攻37名、検査技術科学専攻38名、理学療法学専攻20名、作業療法学専攻18名の計173名が、昨年10月に専門教育期への進級が決定し、保健学科での本格的な専門教育が始まりました。皆、1年半の全学教育で鍛えられたためか逞しくなり、喜々として新たに始まった専門教育科目に取り組んでいます。ぜひこの初心を忘れずに、豊富な医学知識と確実な専門技術をもった心豊かな医療専門職に育って

欲しいと願ってやみません。

保健学科では、3年制の医療技術短期大学部や専門学校を卒業した（あるいは卒業予定の）学生を対象にした3年次編入制度がありますが、その第1回の入学試験が昨年8月27日に行われました。専門試験、外国语試験、面接などの試験により、北大医療技術短期大学部の卒業生、卒業予定者を含めて、看護学専攻10名、放射線技術科学専攻5名、検査技術科学専攻5名、理学療法学専攻2名、作業療法学専攻4名の計26名の合格が決定しました。本年4月から第1期生と合流して、大学教育が始まります。

目覚ましく進歩する医学・医療の中で、私どもの教育する看護師、保健師、助産師、診療放射線技師、臨床検査技師、理学療法士、作業療法士の役割の重要性は益々大きくなるものと予想されます。最先端の医療にも対応できる専門技術をもったこれら医療専門職のレベルアップが、そのまま日本の医療のレベルアップに繋がるものと信じています。さらには、その中から独自の分野の研究者ならびに教育者を育てることを目標として、平成20年度から修士課程、平成22年度から博士課程の大学院の設置を準備中です。

今後、皆様方のさらなるご支援をいただけますようお願いして、年頭のご挨拶といたします。

## 大学院医学研究科再編構想

医学研究科副研究科長 吉岡充弘



北海道大学医学部および医学研究科は平成10年4月より、さらに高度な教育研究を行う大学院重点化への改組が始まり、それまでの基礎系専攻と臨床系専攻が6専攻・18大講座・8協力講座に再編された。さらに平成14年4月には修士課程の医科学専攻が設置され、医学・医療の

関連領域に従事する専門性の高い人材を輩出してきた。しかし、20世紀後半から始まった学問分野の発展と多様化、およびそれを支える新しい概念の発展と技術革新の結果、21世紀を迎えた学問体系はその枠組みを大きく変えつつある。なかでも自然科学分野における学問分野の

発展と多様化は顕著である。21世紀は生命科学の時代とも言われ、ヒトゲノムの全容が明らかにされ、生命科学研究の基盤が整ったものの、ここから一義的に生命現象を理解し、疾病の機構解明や治療法の開発など医学・医療への応用研究に発展させることは困難であることも明らかになった。つまり個々の遺伝子あるいは蛋白質の機能解析だけでは生命現象を正しく説明するには限界があり、分子レベルから個体レベルにわたり、体系的かつ包括的な理解が必要となる。この理解を基盤として、更に高度な生命科学研究に展開されることが求められる。大学院もこの様な変化や新しい枠組みに対応した教育を提供すべく改編することが求められている。平成17年9月に中央教育審議会から出された答申、「新時代の大学院教育」のなかで国際的に魅力ある大学院教育の構築にむ

けて早急に取り組むべき施策が提案された。大学院教育に重点を置く大学は人材養成機能の強化のため、自らの大学院教育改革計画を策定・公表していくことの重要性を指摘している。これらの状況を踏まえ、現状の大学院が抱える課題に真摯に向き合い、改革に取り組むこととした。

これまで本研究科は、研究者として自立するに必要な研究能力を培い、医学・医療における特定の専門分野について深い研究を行い得る研究者の養成を行い、また、学術研究を遂行することを主たる目的としていた。しかし、社会が求める大学院機能には、これら研究者のみならず、医師・医療従事者など高度の専門性を必要とされる業務に必要な能力と研究マインドを涵養することも求められるようになってきており、医学研究科が果たすべき役割は多様化している。すなわち、大学院教育の組織

的展開の強化に向けて、人材養成の目的および教育目標を明確化し、これらに沿った体系的な教育課程の編成と適切な教育・指導体制を実践することが求められている。

このような状況を踏まえ、専攻や分野の別を超えて、それぞれの目的に応じた複数の教育課程（コース）を設けて、大学院生に選択履修させるシステムの導入が適当と考えられる。すなわち、学修課題を複数の科目を通して体系的に履修するコースワークを導入し、その履修内容により、異なる博士号を授与するのである。さらに、博士課程においては地域医療を担う基幹病院等との新たな連携システム（連携大学院構想）を導入し、知的基盤社会を多様に支える高度で知的な人材等を活用することにより、大学院博士課程教育の一層の実質化を図ることが必要であろう。

## 新任就任挨拶

医学部保健学科看護学専攻地域保健看護学講座 教授 佐伯和子



この度、2005年10月1日付で、医学部保健学科看護学専攻地域保健看護学講座に着任し、地域看護学を担当することになりました。地域看護学は、公衆衛生看護、在宅看護、産業看護、学校看護を内容とする学問領域です。私の専門は公衆衛生看護で、基礎教育では主に保健師養成の部分を担当しています。

「公衆衛生看護」という言葉は古めかしく聞こえますが、Public Health Nursingと記載すると公的に住民の健康を守る看護であることが理解でき、健康の自己責任がいわれる時代だからこそ、健康の社会的側面からの支援を大切にしなければならないと思います。私の経験を簡単に述べますと、大学卒業後に看護婦養成所、保健婦養成所を卒業して、兵庫県と北海道で保健所保健師として勤務しました。その後、北海道立衛生学院で1年課程の保健師教育、札幌医科大学と金沢大学で学部教育ならびに大学院教育に携わってきました。保健師は地域の健康に関するジェネラリストとして幅広い活動をしていますが、その基盤になる公衆衛生看護の学問体系化は始まったばかりです。学生への教育と研究活動を通して、現場の活動が発展するための基礎作りに貢献したいと考えています。

私の最初の研究は在宅介護とりわけ老親介護における介護者の意識や介護関係を明らかにすることで、沖縄の一農村をフィールドに訪問面接をしました。子どもが親の介護をになうのは、儒教にもとづく敬老意識、また戦

争時下や戦後の苦しい生活の中で育ててもらったことに対する恩返しの意識など沖縄独特の文化背景があることを体験しました。その後、男性介護者の実態を明らかにする研究、老老介護に備えての介護準備のための小集団介入研究に取り組みました。

研究の対象は、家族から小集団、そして保健師の活動の対象である地域社会へと向かっていきました。保健活動の基本となる地域の看護アセスメントに関して、学生が活用できる教育用のモデルの開発、さらに実践者用の高齢者保健福祉計画策定のための地域看護アセスメントガイドの開発の基礎的な研究を行ってきました。

現在、最も中心的な課題として取り組んでいるのが、保健師の実践能力の構造化と現任教育に関する研究です。地域保健従事者の一職種であり医療技術職である保健師の実践能力の自己評価を分析した結果、保健師の実践能力は保健や看護の知識や技術を中心とする「対人支援能力」と、地域や組織を構築・調整し、保健の施策化を行う「地域支援および管理能力」が抽出されました。この二つの能力の枠組みは、今後の基礎教育や現任教育のプログラムを構築する際には基本になるのではないかと考えています。現任教育については、厚生労働省の地域保健従事者の資質向上に関する検討会等に参加し、現任教育体制構築に取り組んでいます。一方、研究としては新任期保健師の現任教育プログラムの開発、次いで保健師指導者の現任教育プログラムの開発をアクションリサーチを用いて行っています。

最後に、現場に活用される大学、現場と一緒に研究ができる大学を目指して仕事をしていきたいと思います。今後、一層のご指導をよろしくお願ひいたします。

## 寄附講座紹介～分子イメージング講座

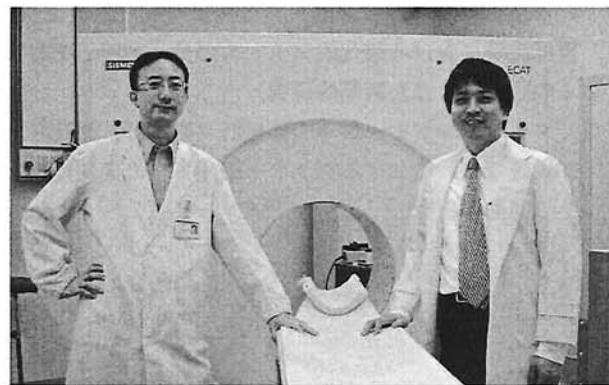
医学研究科分子イメージング講座 久下 裕司、犬伏 正幸

近年、生命科学・医学領域において、生体反応をインビボで分子・細胞レベルの変化として捉え、これを可視化する技術、いわゆる分子イメージング技術が注目されています。

寄附講座・分子イメージング講座は、このような分子イメージング技術の開発、実用化に向けた研究、教育を行うことを目的として、2005年4月に設立されました。この研究分野では分子プローブを用いた生体機能情報の画像化が盛んに行われており、特に、生理活性物質を放射性プローブとして利用できるポジトロン断層撮影法(PET)は最も有力なインビボ分子イメージング法のひとつとして注目されています。また、最近では、MRIや光技術などを用いた新しい機能画像診断法に関する研究も活発になっています。

このような背景の下、当講座では、以下の6つの研究目標を設定し、研究を開始いたしました。

- 1) 新しい機能情報を得られる放射性分子プローブの開発を進める。特にFDGに代わる新しい製剤の開発、応用を推進する。
- 2) 分子生物学の最新の情報を画像化する、新しい分子機能の画像化を目指して、分子プローブの開発や画像技術の革新を進める。
- 3) PETにおけるより精度の高い、簡便な解析方法を開発し、その応用を進める。



- 4) 機能画像と形態画像を重ね合せする手法の改良とその実用化を進める。
- 5) PETで応用されている手法をMRIや光技術など、他の画像技術に利用できるような技術の開発を行う。
- 6) 急速に普及しているPETセンターを支援し、技術の向上を図るために、PETに関する専門家の育成を行う。

現在は、助教授1名、助手1名の非常に小さな講座ですが、放射線医学・核医学分野をはじめとする様々な研究分野の先生方と協力し、生命科学・医学の発展に少しでも貢献したいと考えております。ご支援・ご指導をよろしくお願いいたします。

## 寄附講座紹介～置換外科・再生医学講座

医学研究科置換外科・再生医学講座 古川 博之



移植医療ならびに再生医学の発展を目的として、2001年4月に開設されました。肝移植を中心とした臨床を行っており、現在まで、生体肝移植140例、脳死肝移植6例、ドミノ肝移植1例を行っており、北海道における急性あるいは慢性の末期肝臓病の救命を第一の目標としています。また、膵腎同時移植や小腸移植についても認定施設となつておらず、昨年、道内初の膵腎同時移植も行いました。生体肝移植は、B型やC型肝硬変そして肝癌など

の疾患を中心に行ってきましたが、その成績は5年生存率が80%で、特に小児は、97%が生存しております。また、臓器提供のため啓発活動を続けてきましたが、昨年は北海道大学でも初めて脳死臓器提供がありました。また、道内で2年3ヶ月の間なかった献腎移植が一昨年は8例、昨年は13例と増加しており、全国的に献腎数が伸び悩む中、北海道における献腎移植数を待機患者で割った指数は2.6と全国一となりました。今後臓器提供数のますますの増加が期待できます。

研究においては、

- 1) 移植における免疫寛容の誘導にむけた免疫抑制療法確立のための種々の研究(FTY720やMMAによ

- る免疫抑制療法、co-stimulatory blockerとしてのCTLA4IgやCD40Lg-Abの遺伝子導入やNF $\kappa$ Bのアンタゴニストを用いた免疫抑制法を、小動物から大動物の移植モデルをもちいて研究しています。)
- 2) 臓器保存ならびに虚血・再灌流の研究（臓器虚血・再灌流時における酸化的ストレスの分子機序とそれからの回避にむけた戦略的研究）
- 3) マージナルドナーからの移植肝（微小肝、脂肪肝、加齢肝など）におけるグラフト機能不全の発生機序とその回避の研究

- 4) 肝再生（正常あるいは種々の病態下における肝再生のメカニズムの解明や小肝細胞あるいは不死化肝細胞をもちいた肝細胞移植実験）
- 5) 膵島細胞の保存・移植のための研究（細胞傷害抑制、遺伝子導入による細胞機能制御、ならびに不凍タンパクによる細胞保存）を中心に行ってています。

今後も、世界に先駆けた臨床そして研究をと講座内一同切磋琢磨しております。

## 保健学科第1回市民公開講座 「最近話題の感染症の動向と諸問題」

医学部保健学科看護学専攻地域保健看護学講座 村松宰

医学部保健学科では、平成17年9月3日（土）午後1時から、医学部臨床大講堂において、「最近話題の感染症の動向と諸問題」をテーマに市民公開講座を開催しました。この講演会は、平成15年10月に医学部保健学科が開設されて今秋で2周年を迎えることを記念して、学内から2名、学外から2名の講師を招き、広く市民の方々に公開することを目的に企画したものです。この市民公開特別講座には、90名を超える一般市民、学生、教職員等の参加がありました。

講演は、一演題40分の持ち時間ではじめに我が国の平成17年度学士院受賞者で獣医学研究科の喜田 宏教授による「インフルエンザと人獣共通感染症」、次いで本学検査技術科学専攻の中村仁志夫教授による「ヤコブ病とBSE」、同じく本学理学療法科学専攻の宮本顯二教授による「誤嚥（えん）性肺炎と口腔（こうくう）ケア」、最後に札幌医科大学医学部泌尿器科の高橋 聰氏による「性感染症の最近の動向」をテーマに、私たちの日常生活で身近にかかわる感染症について今日的な問題を取り上げて行われました。

各講演の終了後には、10分程度の質疑応答の時間を設けましたが、いずれの講演にも数多くの熱心な質問が寄せられ、参加された方々の保健医療に対する関心の高さが伺えました。

講演終了後に記入いただいたアンケート調査ではそれぞれの講演すべてについて大いに興味と関心をもって聴いたという方々が多く、来年以降も引き続いだ開催して欲しいという要望が多くありました。これらの要望を参

考に、また、参加者の年代では高齢者が多かったことを勘案して今後も多くの市民の方々に参加いただける公開講座を継続して企画していく予定です。



## 第1回医学部保健学科FDワークショップの報告

医学部保健学科FD実施ワーキンググループ委員長 森山 隆則

保健学科では、平成17年9月16日（金）、ホテル札幌会館を会場に「魅力ある医療職育成プログラムとは」をテーマとして第1回FDワークショップを開催しました。これまで医療技術短期大学部のFD活動としては、全学FDもしくは医学部FDへ、複数名が参加し、報告会を開催するのが通例でした。保健学科の第1期生が2年生になった本年度、松野保健学科長の肝いりで「保健学科独自のFD」を開催することとなりました。

実際の開催に際しては、事前に全教員にアンケートを実施し、可能なかぎり多くの教員が参加できる日程を考慮した結果、一日の充実したプログラムで近くの学外施設での開催というスタイルになりました。その結果、全教員の60%を超える40名の参加者が得られ、保健学科教員の関心の高さが示されました。

ワークショップ前半は2つの基調講演及びミニレクチャーが行われました。はじめに北海道医療大学教授・本学名誉教授 阿部和厚先生の「日本の医療系職業人学生における科学的センスの育成」と題した基調講演、次いで本学科 三神大世教授による「早期臨床体験実習（医短／保健学科）：7年の歩み」のミニレクチャーがあり、続いて高等教育機能開発総合センター部長 小笠原正明教授から「秀評価とGPAの導入の意味するものは」をテーマに基調講演が行われました。



後半はグループ討議として、2つの課題から1題のテーマを選択し、仮の本学科共通科目のシラバスあるいは実習プログラムを作成する作業が行われました。2つの課題はA. 臨床で発生するトラブルの解決能力を高めるための保健学科共通科目を設計しシラバスを作成する、B. 患者や家族に対する接遇能力を高めるための保健学科共通科目（実習）を設計しシラバスを作成する、でした。参加者は専攻の垣根を越えて5つのグループに分かれ、100分間の討論・まとめを経てパワーポイントにてプレゼンテーションを行い、参加者全員での意見交換が行なわれました。その後、記念写真を撮り、懇親会を実施し午後7時30分に散会となりました。

阿部先生には、基調講演の後も、グループ討議・発表・意見交換の全てのプログラムに参加をいただき適切なアドバイス・意見をいただきました。第1回の保健学科FD開催に理解を示して下さり、実際の場面においても大変お世話になりありがとうございました。

FD終了の後日、参加者全員に内容に関するアンケートを実施しました。その結果、おおむね肯定的な意見が多い中で、次回への期待を込めた厳しい意見も散見されています。今後、本ワーキングとしては、第1回FDの記録集の作成を終えて、次回のFD開催に向けた体制を整えなければならない時期に来ています。



## 野球必勝法～平成17年度医局対抗野球大会観戦記

幹事 医学研究科腫瘍外科学分野

北海道大学において、春から数ヶ月間かけて行われる医局対抗野球大会は伝統ある大会の一つとなっている。職務上、対戦チーム間の都合に合わせて試合が組まれるため、他の医局の試合については詳細を報告することが困難なので、我が第二外科の17年度の成績をもって報告することをお許し願いたい。第二外科は野球部出身者が多数在籍していることもあって、最近の数年は優勝の

常連となっている。17年度の1回戦はシードとなり、2回戦からの参加となった。数年前までは補欠を含めて選手全員が野球部出身であり、複数の投手を起用して強敵を蹴散らしていたのだが、最近は選手の高齢化が進み、ときに接戦を紙一重の差で勝ちきる試合も見られるようになってきた。

ここ数年は主将として地味な活躍をみせる中西善嗣

と、エースの卒後3年目新垣雅人の好投によってチームが支えられてきた感が強い。今年度は加賀基知三助手に加え、症例外科医を目指す卒後研修医2名が加勢して、選手不足で大会参加さえ危ぶまれた危機を救ってくれたのであった。2回戦は6月19日に雁来A球場で精神科軍団を相手に試合を行ったが、普段から休養十分の(?)エースの好投と、精神科打線の不調にも助けられ、9対0で勝利を収めた。準決勝は双方の都合で9月4日にずれ込み、雁来A球場にて循環器内科チームを迎撃することとなった。

平日の激務で疲労の見える相手打線に対して、休養十分のエース新垣の好投が当科に有利に働き、強敵相手に10対0の結果となった。先の2戦から学ぶ教訓は『野球は頭脳以外(休養)で勝てる』ということであろう。9月25日には、北大A球場にて、整形外科と優勝を賭けて対戦することとなった。整形外科はいうまでもなく決勝戦の超常連であり、しかも、激戦区の山を勝ち上がっており、調子は上向きのはずである。ただ調子がいい

だけで勝てる相手ではない。とりあえず休養だ。と、決勝戦は一本長打が出るだけで試合結果がひっくり返るような行き詰まる大接戦であったが、3対1にてかろうじて勝利を収め、連覇を果たすことができたのである。休日に足を運んでいただいた各チームの選手および応援団の皆さんほか関係者に深くお礼申し上げると共に、来年度も明るくスポーツができる環境作りへのご協力をお願いしながら筆を置かせて頂く。



## 平成17年度医局対抗サッカー大会の報告

幹事 医学研究科腫瘍外科学分野

平成17年度医局対抗サッカー大会は、前年度優勝した第二外科が幹事を務め開催することとなりました。大会は11月5、6、12、13日に予選が行われ、同27日に決勝トーナメントが行われましたが、17チームが参加し、4ブロックに分かれて2チームが勝ち上がる総当たりリーグ戦を行った後、上位8チームで決勝トーナメントを戦いました。

サッカーは非常に体力を消耗するスポーツですから、多くの若手医師が活躍したチームが有利となります。卒後研修制度の影響で、入局が決まっていないこともあって、チーム作りの段階から各医局の激しい研修医争奪戦があったことを記しておきますとともに、このことに各医局があまり加熱しないような対策が18年度の大きな課題と思われました。



大会では、極めて技術の高い選手が年々増加しており、非常に見応えのある白熱した試合が随所に見られました。この高いレベルにおいて、予選28試合中引き分けが5試合、1点差試合が4試合であり、決勝トーナメントでは5試合が1点差試合という大熱戦が繰り広げられました。

参加チームおよび決勝トーナメントの対戦成績は以下の通りです。

### 【参加チーム(予選ブロック成績順)】

(A組) スポーツ医学、第二外科、麻酔科、第三内科

(B組) 第一外科、第一内科、形成外科、放射線科、皮膚科

(C組) 整形外科、基礎研究、リハビリ、眼科

(D組) 循環器内科、精神科、泌尿器科、第二内科



**【準々決勝】**

基礎対スポーツ 4 対 5、循内対一内 5 対 0、  
整形対二外 4 対 3、一外対精神 8 対 1

**【準決勝】**

循内対基礎 2 対 1、一外対整形 3 対 2

**【決勝成績】**

一外対循内 3 対 1 でした。優勝した第一外科の選手の

皆さん、おめでとうございます。また、来年度の幹事を  
お願い致します。

最後に、会場は大会半年前に抽選の末に確保する必要  
があり、試合時間やルールの調整、当日運営や審判など、  
重要な部分をサッカー部の学生が請け負うことによって  
はじめて成立していることに深謝したいと思います。

## お知らせ

### ◆ 医学研究科・歯学研究科合同慰靈式 ◆

医学研究科及び歯学研究科では、平成17年9月27日(火)午後1時30分からクラーク会館講堂において、この1年間医学・歯学の教育・研究・診療のため尊い御遺体を捧げられた183名の御靈の御冥福をお祈りする慰靈式を執り行いました。

慰靈式には、御遺族、来賓、総長、関係部局長、教職員、学生等344名が参列しました。

式は解剖体御芳名奉読の後、参列者全員による黙祷を行い、続いて本間医学研究科長及び戸塚歯学研究科長から御靈の御遺志に報いるためにも一層の教育・研究・診療の発展に努めたい旨の追悼の辞が述べられた後、参列者による献花を行い、最後に戸塚歯学研究科長から謝辞があり、慰靈式は厳粛のうちに終了いたしました。

### ◆ 教務関係の主な行事予定 ◆

#### ◇大学院

##### 博士課程入学試験

(併せて学位申請に係る語学試験を実施)

2月1日(木)	13:00～15:00	外国語（英語）試験
	15:20～	専門科目試験
2月24日(金)	10:00	合格者発表

##### 研究生入学願書受付期間（平成18年4月入学・継続）

2月24日(金)～3月3日(金)

#### 大学院修了関係

修士課程	1月23日(月) ～25日(水)	公開発表
	2月23日(木)	修士論文最終審査（研究科教授会）
	3月24日(金)	修士学位記授与式
博士課程	1月16日(月) ～20日(金)	公開発表
	2月9日(木)	学位論文最終審査（研究科教授会）
	3月24日(金)	博士学位記授与式

#### 平成18年度入学者入学手続期間

修士課程・博士課程	3月13日(月)～17日(金)
研究生	3月20日(月)～24日(金)

#### ◇学部

##### 入試関係

1月21日(土)・22日(日)：大学入試センター試験

2月23日(木)：私費外国人留学生特別選抜 第2次  
選考試験（小論文・面接）実施

2月25日(土)：第2次試験【前期日程】実施

医学部代々木ゼミナール試験場担当

3月12日(日)：第2次試験【後期日程】実施

#### 授業関係

1) 平成17年度授業最終日・定期試験日程

##### 【医学科】

学年	授業最終日	定期試験
1年次	2月1日(木)	2月2日(木)～14日(火)
2年次	2月3日(金)	2月6日(月)～10日(金)
3年次	2月10日(金)	2月6日(月)～17日(金)
	基礎医学実習 2月20日(月)～3月10日(金)	
4年次	2月24日(金)	
5年次	3月10日(金)	

6年次卒業予定者の発表：2月10日(金)10:00 公用掲示板

##### 【保健学科】

学年	授業最終日	定期試験
1年次	2月1日(木)	2月2日(木)～14日(火)
2年次	2月2日(木)	2月2日(木)～8日(木)

2) 平成18年度授業開始日

【医学科】

1・2年次：4月11日(火)

3年次以上：4月3日(月)

【保健学科】

1年次：4月11日(火)

2年次以上：4月7日(金)

学士学位記授与式及び医学部学位記伝達式

3月24日(金)

10:00～学位記授与式 【本学体育館】

13:00～医学部学位記伝達式 【臨床大講堂】

同 終了後、卒業祝賀会【第1会議室】

国家試験日程

区分	試験日	合格発表日
医師	2月18日(土)～20(月)	3月29日(水)
保健師	2月24日(金)	
助産師	2月23日(木)	3月28日(火)
看護師	2月26日(日)	
診療放射線技師	3月2日(木)	
臨床検査技師	3月3日(金)	4月7日(金)
理学療法士	3月5日(日)	
作業療法士	3月5日(日)	4月12日(水)

## ◆ 平成18年度科学研究費申請状況 ◆

科学研究費補助金の申請件数年度別一覧

医学研究科・医学部

研究種目	審査区分	14年度	15年度	16年度	17年度	18年度	備考
特別推進研究		1	1	0	0	0	
特定領域研究		43	33	28	42	45	計画研究・公募研究を含む
基盤研究(S)		2	3	3	4	4	
基盤研究(A)	一般	13	9	9	5	5	
	海外学術調査	0	0	0	0	1	
基盤研究(B)	一般	49	39	38	51	43	
	海外学術調査	4	1	2	2	1	
基盤研究(C)	一般	38	33	41	54	51	
	企画調査	3	1	2	1	2	
萌芽研究		58	63	62	67	66	
若手研究(A)		0	0	3	2	1	
若手研究(B)		11	6	20	27	27	
合計		222	189	208	255	246	

※ 申請件数は新規の数字です。

※ 15年度以前は研究科(診療所含む)の件数、16年度以降は医学部(保健学科、診療所)も含む件数です。

### 編集後記

世の中は絶えず流動的に動いているが、この流れを作る因子の一つに情報があるが、インターネットの普及によりいつでも膨大な情報が手に入れられる時代になり、流れのダイナミックスさが混沌とした感もある。お正月の番組で、評論家、弁護士などが討論する場面があったが、お互いが意見を述べただけで、その討論の方向性が見えなかった。本質とは何か、真理とは何かを常に自問自答、多問多答しないと流されるばかりになる。情報がなにを言おうとしているのか、空白の行間にについても思いを馳せねばならない。このため情報の正確性については注意をしなくてはならない。本紙面も多く情報にあふれているが、情報を共有し、今後の参考になればうれしい限りです。広報誌に投稿をいただいた各執筆者の先生に感謝し、広報誌を最後まで読んでいただきありがとうございます。(高橋光彦)

### — Home Page のご案内 —

医学部広報は

<http://www.med.hokudai.ac.jp/ko-ho/index.html>

でご覧いただけます。また、ご意見・ご希望などの受け付け電子メールアドレスは、

[kouhou-office@med.hokudai.ac.jp](mailto:kouhou-office@med.hokudai.ac.jp)

となっております。どうぞご利用ください。

### 北海道大学大学院医学研究科／医学部

発行 北海道大学医学研究科医学部広報編集委員会  
060-8638 札幌市北区北15条西7丁目  
連絡先 医学部庶務係 電話 011-706-5003  
編集委員 神谷 温之、西村 正治、高橋 光彦  
石津 明洋、小橋 元、佐藤 松治